

滞日韓国人中高生における二言語能力と言語環境をめぐる問題

朴 良順

1. はじめに

日本にいる韓国人は、大きく二つに分けられる。一つは、植民地時代前後に来日し、永住している在日コリアン1世とその子孫の「オールドカマー」、もう一つは、近年、ビジネス・結婚・留学などで来日した韓国人とその家族の「ニューカマー」である。これらの二つの日本語・韓国語間バイリンガルを対象とした研究は、数多く存在する。特に、生越(1983、2005)では、オールドカマー韓国人年少者を対象とし、彼らの使用言語に注目した結果、母語維持能力の低下と共に日本語モノリンガル化の傾向が見られることを、報告した。

しかし、ニューカマー韓国人年少者については、今まであまり取り上げられていないため、バイリンガルとしての特徴などが、さほど知られていない。彼らは、ビジネス・企業の駐在員・留学などの目的で来日した両親とともに生活しており、特に、東京都新宿区にある東京韓国学校¹(以下、「B(バイリンガル)学校」と称する)に在学している場合が多い。

本論では、B学校の中高生を滞日韓国人中高生と名づけ、彼らの二言語併用上の言語環境を明らかにする。また、彼らの二言語能力には個人差が多く観察されるが、その二言語併用上の特徴及びそれに関わる要因を明らかにする。

本論の構成においては、まず、先行研究を考察し、調査及び分析の枠組みを述べ、その調査結果を考察する。結果及び考察においては、主に次の3点の観点から述べる。

- (1) 二言語能力に関わる言語環境
- (2) 学校外の交流範囲
- (3) 交友関係と使用言語

2. 先行研究

日本にいる韓国人バイリンガル年少者を対象とした研究では、上述したように、生越(1983)などがある。生越(1983)では、大阪で民族学校に通わせている家庭のインフォーマントほど家庭内で韓国語(朝鮮語)を使う割合が高く、民族学校の影響力が大きいことを明らかにした。さらに、生越(1983)では、使用言語の差は、民族学校の影響力を除けば、相手と場面によると指摘した。一方、20年後に同じ地域に同じ調査を行った結果である、生越(2005)では、民族学校の生徒またその親のうち、日本で生まれた場合は、韓国語能力の低下が著しく、韓国語使用も少ないことがわかった。その際の韓国語能力を左

¹ 東京韓国学校は、韓国系民族学校4校の一つ(大阪2校、京都1校、東京1校)。中1～高3年のA/B 2クラスずつの男女共学で、1945年に創立された。付設小学校もある。

右する大きな要因として出生地が挙げられている。

一方、在日コリアン1世は、コリアン同士のコミュニティをなして暮らしている場合が多い。黄（1994）の記述によれば、彼らのコミュニティは、地域的な集住という可視的な形の他に、いわゆる密集地域ではないが、人のつながりだけに頼って形成されているコミュニティも存在する。集住の歴史は渡日の初期から続いており、1世の持つ特殊な歴史・社会的な背景の産物であるコリアンコミュニティの存在は、1世の日本語習得に深く関わっている。すなわち、コミュニティ内では、日本語母語話者には不自然な印象を与える日本語が使用されている場合が多いが、そうした言語を用いて、話者同士互いに影響を及ぼしながら意思疎通を行っていることであった。

これらの先行研究は、インフォーマントの二言語能力に、出生地、民族学校の影響、コミュニティの属性などの要因が大きく関わっていることを明らかにした。本論では、ニューカマーの滞日韓国人中高生に注目し、オールドカマーとの相違を検討していきたい。

3. 調査及び分析の枠組み

3.1 調査概要

滞日韓国人中高生の言語環境を明らかにするため、B学校の生徒の68名を対象とし、アンケート調査を実施した。調査は、2006年2月11～17日に行い、場所はB学校周辺にある塾を借りて行った。インフォーマントの学年、男女の構成は、表1を参照されたい。

【表1】 インフォーマントの構成

学年	中1	中2	中3	高1	計
男子	6名	15名	5名	7名	33名
女子	10名	6名	11名	8名	35名
計	16名	21名	16名	15名	68名

本文での記述においては、インフォーマント68名を、個人番号で表示した。個人番号は、学年別に分け、中1は1、中2は2、中3は3、高1は4で始まる3桁とし、最後に男子生徒の場合はM、女子生徒の場合Fを、それぞれ付した。

調査項目は、次の3点であった。

- ① 二言語能力に関するもの：来日時期、滞日期間、学校歴、二言語能力の自己評価
- ② 学校以外の交流範囲：居住地域、教会とそこでの交流範囲
- ③ 交友関係と使用言語：学校内の友達(5名)、学校外の友達(5名)、学校外の知人(5名)

3.2 分析の枠組み

分析においては、アンケート調査に基づき、その結果について分析、考察を行う。また、

筆者は2000年からB学校の周辺にある塾で、国語（韓国語）科目の講師として、B学校の生徒たちと接している。今回の68名とも関わりがあり、日ごろの言語能力を観察してきた。その観察の結果についても分析の際、述べていきたい。

4. 二言語能力に関わる要因

4.1 インフォーマント

インフォーマント68名は、それぞれ来日時期・滞日期間が異なっているため、二言語能力もさまざまである。次の図1は、個人別に、年齢、来日状況、学校歴、二言語能力、滞日期間を、滞日期間の長い順から降順に並べたものである。

まず、図1では年齢（数え年）と学年をそれぞれ示し、その時期に滞日した場合は、網掛け（ ）をし、さらに、日本の学校に通った場合は● B学校の場合は○ インタナショナル学校の場合は◆で示し、区別した。これに基づき、来日時期を示し、一度韓国へ帰国してから、再度日本に来た場合は、（ ）にマイナス記号をつけて、帰国時期の年数を表示した。これらを総合的に算出したものを、滞日期間とする。

日本語能力と韓国語能力は、自己評価の方法を用いた。自己評価には、「0」は「全然できない」、「5」は「ある程度できる」、「10」は「ネイティブ並」を提示し、評価に参考するようにした。話す・聞く・読む・書くの4技能の言語能力を、「0」～「10」の間の数値で評価してもらい、その平均値を表しているものを、その個人の日本語能力と韓国語能力とする。自己評価は、客観的な資料とは言えないが、二言語に対する自信の度合とも捉えられることから、本論では個人の二言語能力としてふさわしいと思い、採用した。

4.2 学校歴と二言語能力

次の図1より、滞日期間中の学校歴を見ると、高学年になるにつれ、B学校に在籍した期間が長くなっている。68名のうち、幼稚園以外に日本の学校に通った経験がある生徒は、31名であった。このことから、インフォーマントの多くは、B学校あるいは来日以前の韓国の学校に通った期間が長く、教育内容も韓国のシラバスによるものであることが分かる。特に中学校でB学校以外の学校に通った生徒は3人しかいないなど、高学年になるほど日本人と接する機会が少なくなることが観える。

ただし、滞日期間3年以下のうち、日本の学校歴がある生徒（順番61の219M）は、日ごろの観察によると、日本語能力も優れており、なおよく日本語で会話していた。このことから、日本の学校でネイティブとの接した経験は、日本語能力に影響を及ぼすといえよう。

[図1] インフォームト

順番	年(才)	年齢																		来日時期 (帰国期間)	日本語 クラス	日本語 能力	比較	韓国語 能力	滞日期間
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18						
1	401F																			1才	超上級	10.00	>>>	6.25	17年
2	301F																			日本生まれ	超上級	10.00	>>>	8.00	16年
3	302F																			1才	上級	8.00	>>>	5.50	16年
4	201M																			日本生まれ	中級	9.50	>>>	5.75	15年
5	202M																			日本生まれ	中級	9.50	>>>	8.00	15年
6	203M																			日本生まれ	上級	10.00	>>>	5.50	15年
7	206F																			日本生まれ	上級	7.50	>>>	8.50	15年
8	101F																			日本生まれ	超上級	9.75	>>>	8.25	14年
9	102F																			日本生まれ	超上級	6.75	>>>	6.50	14年
10	103M																			日本生まれ	上級	10.00	>>>	10.00	14年
11	305M																			3才(-1)	超上級	8.00	>>>	7.75	13年
12	402M																			3才	超上級	8.75	>>>	5.00	12年
13	304F																			2才(-3)	上級	8.50	>>>	7.25	12年
14	403F																			2才(-1)	上級	8.00	>>>	7.00	11年
15	306M																			3才(-3)	上級	10.00	>>>	7.75	11年
16	205F																			4才(-1)	中級	5.00	>>>	7.50	11年
17	207F																			5才	上級	9.50	>>>	7.25	11年
18	209M																			5才	上級	9.00	>>>	4.00	11年
19	104F																			2才(-2)	超上級	9.00	>>>	5.00	11年
20	406M																			小1	上級	8.75	>>>	7.50	10年
21	303F																			1才(-6)	中級	5.50	>>>	9.00	10年
22	308F																			1才(-6)	超上級	10.00	>>>	5.00	10年
23	204F																			1才(-5)	中級	9.75	>>>	9.50	10年
24	208M																			4才(-3)	中級	10.00	>>>	9.25	9年
25	210M																			7才	上級	7.50	>>>	8.00	9年
26	404M																			小2(-1)	中級	6.00	>>>	7.50	8年
27	409F																			小3	上級	8.50	>>>	9.00	8年
28	410M																			小3	超上級	6.00	>>>	9.00	8年
29	211M																			小1	超上級	10.00	>>>	10.00	8年
30	106M																			7才	上級	10.00	>>>	7.25	8年
31	107M																			7才	上級	10.00	>>>	8.00	8年
32	108M																			7才	超上級	9.75	>>>	9.00	8年
33	408F																			小2(-2)	超上級	8.75	>>>	10.00	7年
34	411F																			小4	上級	6.75	>>>	9.50	7年
35	417F																			6才(-5)	中級	6.00	>>>	7.75	7年
36	212M																			小2	中級	7.50	>>>	9.75	7年
37	109F																			小1	上級	8.50	>>>	10.00	7年
38	412M																			小5	超上級	4.50	>>>	9.25	6年
39	413F																			小5	上級	4.50	>>>	10.00	6年
40	310F																			小4	中級	6.75	>>>	9.75	6年
41	312F																			4才(-7)	初級	4.25	>>>	10.00	6年
42	213M																			小2(-1)	上級	8.25	>>>	8.25	6年
43	214M																			小3	上級	10.00	>>>	10.00	6年
44	215M																			小2(-1)	中級	8.75	>>>	8.75	6年
45	110F																			小2	上級	9.00	>>>	8.50	6年
46	414M																			小6	超上級	8.75	>>>	10.00	5年
47	309F																			小2(-2)	超上級	8.00	>>>	10.00	5年
48	313M																			小2(-2)	中級	5.50	>>>	10.00	5年
49	314F																			小5	中級	5.25	>>>	8.25	5年
50	315F																			小5	中級	5.00	>>>	10.00	5年
51	216M																			小4	上級	6.75	>>>	7.50	5年
52	112F																			小3	超上級	8.00	>>>	7.00	5年
53	416M																			中1	超上級	8.00	>>>	10.00	4年
54	316M																			小2(-1)	中級	7.25	>>>	10.00	4年
55	217F																			小5	中級	6.50	>>>	10.00	4年
56	218M																			小5	中級	7.00	>>>	10.00	4年
57	105F																			4才(-7)	中級	7.00	>>>	8.00	4年
58	111M																			小2(-2)	中級	9.75	>>>	10.00	4年
59	317F																			中1	中級	4.25	>>>	10.00	3年
60	318M																			中1	中級	7.50	>>>	9.25	3年
61	219M																			小6	中級	9.00	>>>	10.00	3年
62	220M																			小6	中級	5.75	>>>	10.00	3年
63	221F																			中1	中級	3.75	>>>	10.00	2年
64	113M																			小6	中級	6.50	>>>	10.00	2年
65	114F																			小6	初級	3.25	>>>	9.75	2年
66	115F																			小6	初級	2.25	>>>	10.00	2年
67	116F																			小6	中級	5.50	>>>	9.75	2年
68	418F																			高1	中級	4.50	>>>	10.00	1年

4.3 滞日期間と二言語能力

上の図1より、二言語能力の自己評価を見ると、滞日期間が11年以上の生徒のほとんどは、二言語能力のうち、日本語能力のほうが韓国語能力より高いと答えている。これに対し、滞日期間が10年から8年の間は、二言語能力に対する自己評価は、ばらついており、個人差が目立つ。特に、来日期間中に帰国した経験がある生徒は個人差が目立つ。

次の表2は、一度来日し、韓国に帰って再び来日した生徒のうち、帰国期間年数が2年以上の14名を取り上げ、帰国期間によって日本語能力に支障があるかどうか、筆者の判断を書き込んだものである。日本語能力に負の影響が見られた生徒は、306M、303F、417F、312F、313M、105Fであり、帰国期間の長さとともに、313M以外は小学校時代に日本を離れていた点が共通していた。このことから、言語形成期として重要なのは、小学校時代であるといえよう。

【表2】 帰国期間と日本語能力

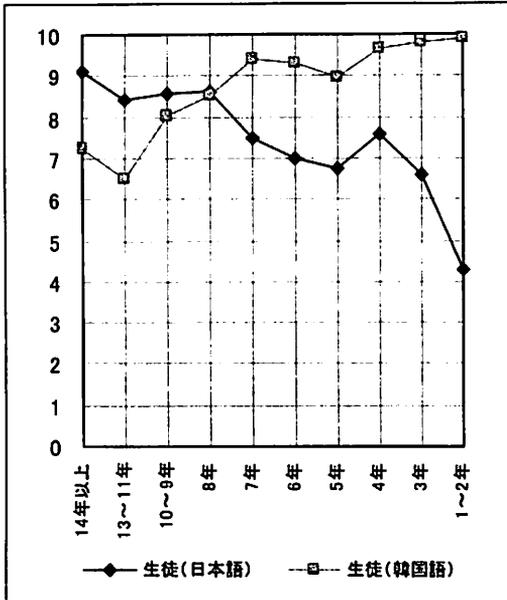
個人番号	来日時期 (-帰国期間)	帰国時期	日本語能力への負の影響	日本語 (自己評価)	韓国語 (自己評価)	滞日 期間
304F	2才(-3)	幼稚園~小2	ない	8.50	7.25	12年
306M	3才(-3)	小3~小5	若干ある	10.00	7.75	11年
104F	2才(-2)	小3~小4	ない	9.00	5.00	11年
303F	1才(-6)	小1~小6	かなりある	5.50	9.00	10年
308F	1才(-6)	3才~小2	ない	10.00	5.00	10年
204F	1才(-5)	3才~幼稚園	ない	9.75	9.50	10年
208M	4才(-3)	小3~小5	ない	10.00	9.25	9年
408F	小2(-2)	小6~中1	ない	8.75	10.00	7年
417F	6才(-5)	小4~中2	かなりある	6.00	7.75	7年
312F	4才(-7)	小2~中2	かなりある	4.25	10.00	6年
309F	小3(-2)	中2~中3	ない	8.00	10.00	5年
313M	小3(-2)	中1~中2	若干ある	5.50	10.00	5年
105F	4才(-7)	5才、7才、小2~小6	ない(*母親が在日3世)	7.00	8.00	4年
111M	小2(-2)	小6~中1	ない	9.75	10.00	4年

このように個人差があるものの、図1では全体的に滞日期間が長くなると、日本語能力は上達し、韓国語能力は低下する。このことは、7年以下の場合は、主に韓国語能力を日本語能力より高く評価していることから分かる。滞日期間の各グループ別に、二言語能力を比較して示したものが、次の図2である。

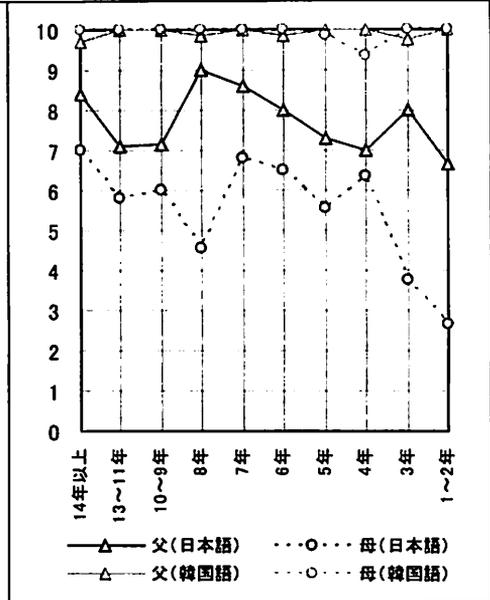
図2を見ると、14年以上と13~11年では、日本語能力は9以上で7を超えている。韓国語能力と日本語能力の差は大きい、10~9年と8年はそれほど差が見られず、7年以下は、二言語の差が大きく隔たっており、しかも韓国語能力が日本語能力を上回っている。韓国語は、6.50~9.92の間に位置し、いずれの場合も韓国語能力は高く維持されていることが分かる。これに対し、日本語能力は、4.29~9.10の間で、その幅は大きい、3年が過ぎるとそれほど不自由を感じないようである。

家族のうち、親の二言語能力を生徒に同じ方法で評価してもらい、次の図3に示した。図3を見ると、まず、韓国語能力については、ほぼネイティブ並みの10がほとんどである。

【図2】 滞日期间と二言語能力(生徒)



【図3】 滞日期间と二言語能力(父/母)



これに対し、日本語能力は、父親の場合 6.67~9.00 の間で幅が狭く全体的に高く評価しているが、母親の場合、父親より劣っていると生徒たちは評価し、2.26~7.00 の間にとどまっている。父親は来日以前からある程度の日本語能力を持っている一方で、母親に対しては、生徒自身より低く、滞日年数が長くなってもあまり伸びていないと評価していた。

このことから、両親の場合は、滞日期间が長くなってもそれほど上達せず、ある程度のレベルにとどまっているが、生徒たちの場合、年少者であるため日本語能力に滞日期间が大きく影響していることが分かる。なお、年少者の韓国語能力は民族学校での教育の影響で、高く維持されていた。

4.4 家庭内の言語環境と二言語能力

ここでは、家庭内の言語環境について考察する。次の図4の出生地を見ると、インフォーマント 68 名のうち、日本生まれは、生徒の場合 8 名であり、父親は 3 名、母親は 1 名であった。すなわち、従来の在日コリアンのような永住者は少なく、ほとんどがニューカマーに属することが分かる。これは、図6の親戚の構成からも読み取れる。日本に親戚が半分くらいいると答えた生徒は 3 名しかおらず、いないと答えたのが 78% であった。

図5の職業別に見ると、父親は 70% が韓国の企業の駐在員であり、母親は 85% が主婦であった。また、図7と図8の付き合いの範囲を見ると、父親は日本人と接する機会が多く、母親の場合は、ほぼ韓国人との付き合いだと答えた割合が 82% を占めている。

【図4】 出生地

生徒	韓国	60
父	韓国	65
母	韓国	67

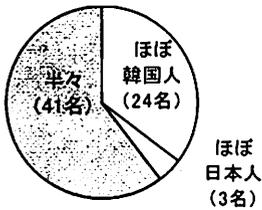
【図6】 日本に親戚がいるか？

14年以上	いない(9)	若干(1)
13~11年	いない(6)	若干(1)
10~9年	いない(6)	
8年	いない(4)	若干(2) 半分(3)
7年	いない(5)	
6年	いない(5)	若干(3)
5年	いない(5)	若干(2)
4年	いない(6)	若干(2) 半分(1)
3年	いない(4)	
1~2年	いない(4)	若干(2)

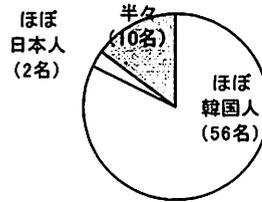
【図5】 父／母の職業

父	公務員／会社員(47)	自営業(16)	その他
母	主婦(58)		

【図7】 父の付き合いの範囲



【図8】 母の付き合いの範囲



さらに、図9と図10は、両親の友達と会う機会がどのくらいあるかに対し、「時々ある」場合が多く、母親の友達とは、「よくある」と答えた割合も少なくない。このことから、日本で、断絶された生活ではなく、ニューカマー同士の交流が活発であることが分かる。

このような家庭内の言語環境では、親世代が日本生まれでなければ、韓国語が家庭内で多く使われることを示唆し、親の韓国語の影響力は大きいと予想される。

【図9】 お父さんの友達と会う機会があるか？

【図10】 お母さんの友達と会う機会があるか？

14年以上	ほとんどない	時々ある	
13~11年	ほとんどない	時々ある	
10~9年	ほとんどない	時々ある	
8年	ほとんどない	時々ある	よくある
7年	ほとんどない	時々ある	
6年	ほとんどない	時々ある	
5年		時々ある	
4年	ほとんどない	時々ある	
3年	ほとんどない	時々ある	よくある
1~2年	ほとんどない	時々ある	よくある

14年以上	ほとんどない	時々ある	よくある
13~11年	ほとんどない	時々ある	よくある
10~9年		時々ある	
8年	ほとんどない	時々ある	よくある
7年	ほとんどない	時々ある	
6年	ほとんどない	時々ある	よくある
5年	ほとんどない	時々ある	よくある
4年	ほとんどない	時々ある	よくある
3年	ほとんどない	時々ある	よくある
1~2年	ほとんどない	時々ある	よくある

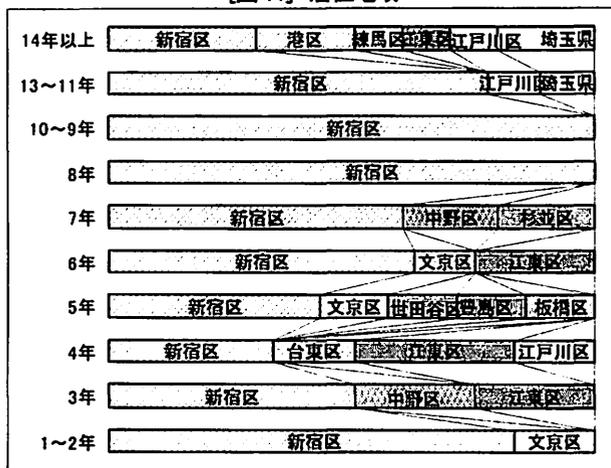
5. 学校外の交流範囲

5.1 居住地域

滞日韓国人中高生が通っているB学校は、新宿区に位置している。この場所は、ニューカマー韓国人が多く集まる新大久保からも近いところである。生徒の居住地域は、図 11 のように、新宿区が多く、その割合は、63%に達している。すなわち、彼らは韓国人ニューカマーのコミュニティ内で生活していることが分かる。

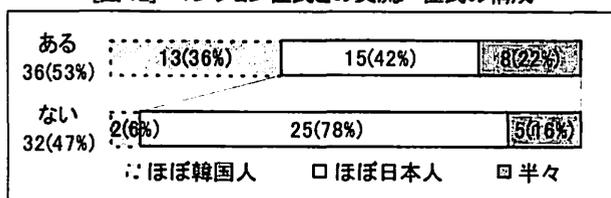
居住形態は、全員マンション住まいであり、マンション住民の構成においても、韓国人

〔図 11〕 居住地域



が多かった。まず、マンション住民との交流が「ある」と答えた割合は53%であり、マンション住民の構成は、「ほぼ日本人」の割合が多いものの「ほぼ韓国人」と「半々」の割合も、それぞれ36%、22%を占めている。これに対して、マンション住民との交流が「ない」と答えた場合は、そのマンション住民の構成においても、「ほぼ韓国人」の割合が少なかった。

〔図 12〕 マンション住民との交流／住民の構成



ここで注目したいのは、「ほぼ韓国人」の割合は15名の19%を占めていることである。すなわち、居住地域と、そこでの交流は、主に韓国人であることが分かる。つ

まり、このことは、地域的にも韓国人コミュニティが形成されていることを意味する。

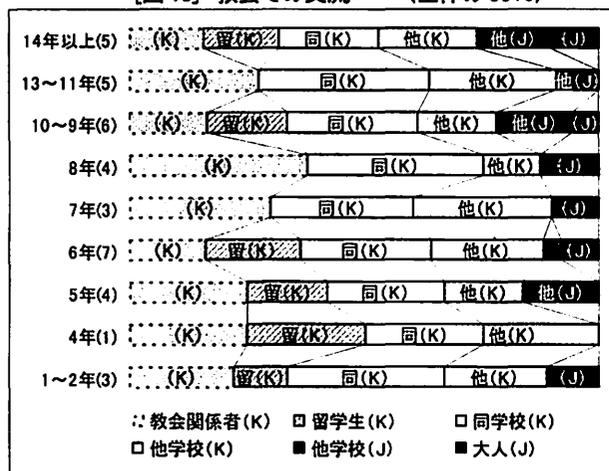
5.2 教会

学校外の交流として、教会が挙げられる。特に、韓国人同士の交流は教会を中心に頻繁に行われていると言われる。今回の調査でも、生徒のうち、38名の56%が、教会に通っていた。

教会で交流がある範囲を選択（複数選択を可能にした）してもらい、その結果を次の図 13 に示した。図 13 での「K」は韓国人を、「J」は日本人を示す。

これによると、日本人との付き合いは、同年代の日本人友達は9%で、大人の日本人との交流は、7%にとどまり、それ以外はほとんど韓国人であった。

【図13】 教会での交流 *(全体の56%)



このことから、これらの教会は韓国人の教団であり、そこでの交流も主に韓国人であることが分かる。特に、同じB学校生徒同士の交流と、他学校の同年代の友達との交流の割合が多く、韓国人留学生との交流は少なかった。このことから、生徒達の交流範囲は、限られている言語環境の中におかれていることと思われる。

6. 交友関係と使用言語

ここでは、3つの交友関係に注目した。学校内の交友関係、学校外の交友関係、さらに学校外の知人（主に塾、スポーツ、音楽教室の先生であった）との交流である。交友関係は、この3つの範囲で、5人以内に答えてもらった。また、会話で使われる使用言語を書いてもらい、これらの結果を、図14をまとめて示した。この際、図1と同様、滞日期間の長い生徒から降順で並べた。

6.1 全体の交友関係

図14の右側では、3つの交友関係とその使用言語をまとめたものである。自分の使用言語は網掛けの種類(透明)によって区別した。相手の使用言語は、学校内の友達(■ + □)、学校外の友達(◆ × ◇)、学校外の知人(▲ + △)別に記号で示した。すなわち、網掛けの部分と記号の色合いが黒いほど日本語の使用が多いことを、白いほど韓国語の使用が多いことを意味する。これを見ると、滞日期間が長い上段に位置するほど、黒い部分が多いものの、必ずそうとは言い切れない結果であった。すなわち、滞日期間という要因は、使用言語を決定するほど強い要因ではないといえよう。

また、「学校外の友達」については、生徒の68名のうち28名が、学校外の友達はいないと答え、基本的にはB学校内の交友関係が彼らの言語生活の中心であることが覗える。

さらに、図15では、3つの交友関係における友人を、その名前から韓国人名か日本人名によって、韓国語母語話者と日本語母語話者に分けて示した。これによると、韓国語母語話者の構成は、学校内の友人の場合98%、学校外の友人の場合57%、それ以外の知人の場合89%であった。すなわち、滞日韓国人中高生の交友関係は、韓国語母語話者が多く、日本語母語話者、すなわち日本人との接触は少ないことを示唆する。

6.2 学校内の交友関係と使用言語

図 14 の中央に示した「学校内の友達への使用言語」は、インフォーマント 68 名に学校で親しい友達を 5 名まで挙げてもらい、その友達との会話で使う言語を表したものである。その際、自分と友人のそれぞれについて、使用言語が日本語の場合を 3、半々の場合を 2、韓国語の場合を 1 とし、その平均値を算出した。自分の使用言語の平均値は ◇ で示し、その友人の 5 名の平均値は × で示したため、両者の使用言語が一致する場合は ◇ になり、一致しない場合は、その差を見やすく ____ で示した。

まず、自分の使用言語と、友人の使用言語との差が見られるのは、順番—個人番号を挙げると、7-206F、26-404M、37-109F、39-413F、44-215M の 5 名である。それ以外は、自分の使用言語と友人の使用言語が一致するかなりの場合で共通している。例えば、39-413F の場合、普段韓国語しか言わないが、日本語の理解力は十分あるため、友達との会話に何も不自由はない。また、その友達との付き合いも 4 年以上になるので、それぞれ気楽に話せる言語を使っているようであった。

また、学校内の滞日韓国人中高生同士の会話では、日本語・韓国語のどちらか片方の言語しか使わないと答えた生徒も 19 名であった。このうち、日本語しか使わないと答えた生徒は、1-401F、19-104F、22-308F、31-107M、47-309F の 5 名であり、彼らはネイティブ並の日本語能力を持ち、1-401F 以外は友人との使用言語も日本語で一致している。これに対し、韓国語しか使わないと答えた生徒は、14 名であり、そのうち 6 名は、滞日期間が 3 年以下であるが、それ以外の 8 名は滞日期間が 5～11 年である。この 8 名は、日本語の使用を避けようとする意識が強く、そのことが日本語能力にも負の影響を与えているものと思われる。

さらに、図 14 の中央の図では、上段に位置する滞日年数の長い生徒でも、日本語を使わずに韓国語で話したり、日本語と韓国語を半々で使ったりすることもある。これは、B 学校では、韓国からの転入生が多く、またそれぞれ滞日期間が異なっているため、これを考慮し、友達とコミュニケーションをとるためである。すなわち、滞日期間が 2 年以下の場合でも、日本語を使わず、もっぱら韓国語で日常の言語生活を営むことが可能であった。

6.3 「半々」のタイプ

ここでは、「半々」の場合、すなわち、日本語と韓国語の使用が「半々」の際のコード・スイッチング（以下、「CS」と表記する）のタイプに注目した。まず、使用言語の「半々」とするその内容を、次の 4 つのタイプに分け、その中から一番頻繁に使う形式を選んでもらった。場合によって選択は 2 つまで可能とした。

この 4 つのタイプは、朴（2005）によると、日本語・韓国語間バイリンガルによく見ら

- A. 話+話 例: 내일부터 시험이네. 난 시험 때만 되면~~ 韓国語で続く。 昨日テレビ見た?~~ (日本語で続く)。 (明日から試験だね。私は試験中になると)
- B. 文+文 例: 내일부터 시험이네. どうしよう! ぜんぜん勉強してないんだけど. 뭐가 중요하대? (明日から試験だね。) (何が重要だっ?)
- C. 句+句 例: 明日から 시험이네. / 공부 ぜんぜん 안 했는데. / 이거 중요하니까 おぼえて! (試験だね。) (勉強) (してないけど。) (これ重要だから)
- D. 語+語 例: 明日から 시험だね / 공부しないと / がんばる 하자. / 面倒くさい 하자. (試験) (勉強) (しよう) (するじゃん)

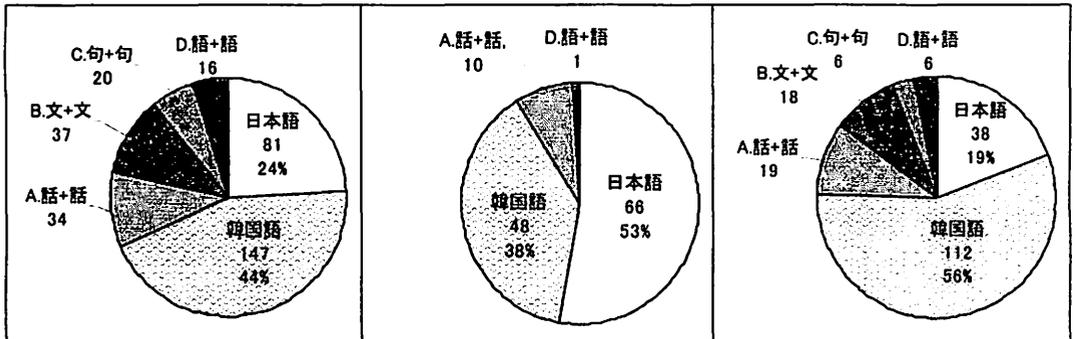
れるタイプであり、特にDタイプの「日本語用言+hata (がんばる 하자)」の混合形式 CS は、在日1世あるいは留学生によく見られる特有のタイプであった。しかし、日韓両言語の規範意識が強い滞日韓国人中高生にはあまり見られないタイプであり、今回のデータからも、Dタイプはあまり見られないと予測した。

次の図16~21は「半々」の結果を、3つの交友関係別に自分と相手に分け、使用言語と頻度数を示したものである。まず、図16と図19を見ると、学校内の友達との会話に使われた「半々」の割合は、A・Bタイプが多いもののDタイプも見られた。しかし、今回の調査でのDタイプは、もっぱら「明日から試験(試験)だね」「 공부(勉強)しないと」という名詞のCSタイプであることを確認した。

【図16】 学校内交友関係—自分

【図17】 学校外交友関係—自分

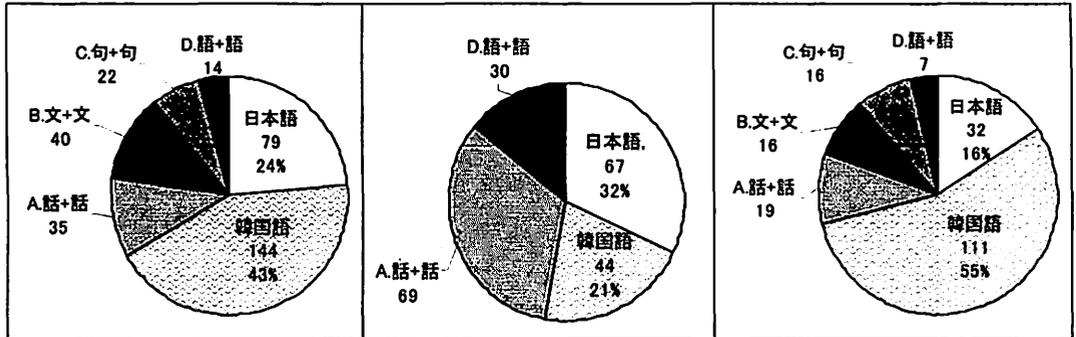
【図18】 学校外の知人—自分



【図19】 学校内交友関係—相手

【図20】 学校外交友関係—相手

【図21】 学校外の知人—相手



インフォーマントの5-202Mの場合、日本語を基盤とした文に韓国語の名詞を借用する場合があっても、「がんばる 하자」のような言い方は、決して口にしないと強調した。逆に37-109F、21-303F、40-310Fの場合、韓国語を基盤とした文に日本語の名詞を借用する場合が多く、やはり「がんばる 하자」のような言い方には違和感があると答えた。このような傾向は、滞日韓国人中高生のCS形式を扱った、朴(2003)²と吉田(2005)³の研究でも確認できる。すなわち、Dタイプの場合は、以下のような名詞のCS例が多く挙げられている。

- (例1) 선생님한테도 **相談해** 봐야지. (吉田 2005-滞日期間4年)
(先生にも) (しないと)
- (例2) 아냐 그렇게 **追いかけて** 아니죠! (朴 2003-滞日期間9年)
(いや、そんなに) (じゃないんですよ。)
- (例3) 네, **자기소개서**ってさー、お父さんに見せる? (吉田 2005-滞日期間13年)
(自己紹介書)
- (例4) えー、でも、**신방과** そういうの、好きじゃなーい? (吉田 2005-日本生まれ)
(新聞放送学科)
- (例5) 多分、**면접**、入ってー、**질문**されて、分からない質問だったらー (吉田 2005-日本生まれ)
(面接) (質問)

一方、図17と図20の学校外の交友関係の場合では、A・Dタイプしか見られなかった。さらに、学校外の友達に対し、自分は、日本語か韓国語を使い、「半々」の使用は避けているのに対し、その相手は、A・Dタイプの割合が多い。このことは、B学校生徒同士でなければ、「半々」のタイプはA・Dタイプに限られており、「半々」タイプに制限が生じることを示唆する。

これに対し、図18と図21の学校外の知人の場合は、韓国語の使用率が目立つ。また、自分と相手との半々のタイプも似ているが、自分は、C・Dのタイプを相手ほど使わないと答えていた。すなわち、塾の韓国人先生には、韓国語で対応しようとする意識が強く、半々の頻度から見ると、それほど敬遠する相手でもないことが分かる。

以上のことから、「半々」の割合が一番高いのは、学校内の友達との会話であり、学校外の知人、すなわち塾の先生とのやり取りでも「半々」の頻度は少なくない。学校と塾は、生徒にとって日常生活そのものである。つまり、一つのコミュニティの一領域とあり、気を許す相手であるからこそ可能であると思われる。このことは、学校外の友達になると、「半々」の割合が、少なくなることと、対照的である。ニューカマーというコミュニティ

² 滞日韓国人中高生と筆者との会話を録音したデータの例である。

³ 来日時期が似ている友達同士の会話を録音したデータの例である。

⁴ 「追っかけ」の誤用。

の存在は大きく、言語環境にもこれに大きく影響していることが分かる。滞日韓国人中高生において「半々」というのは、アコモデーション的な使用であると同時に、彼ら特有の言語コードであるといえよう。

7. まとめと今後の課題

滞日韓国人中高生の言語環境としては、家庭、学校、及び居住地域、教会などでの交流関係が考えられる。いずれにせよ、彼らの交流範囲は、韓国人が大半を占めており、ニューカマー韓国人コミュニティ内で生活していることが分かった。逆に、日本人との接触は、少ないといえる。また、交友関係は、学校内の友達の交流関係がほとんどであり、それ以外の交流関係もそのつながりに近いことが分かった。さらに、交友関係における使用言語には、滞日期間の長さが大きく影響するものの、場合によっては、友達に合わせて、韓国語を使う場合も少なくなく、主流言語は韓国語であることが分かった。

以上のことから、滞日韓国人中高生は、日本人との接触が多いオールドカマー韓国人年少者と、言語環境が大きく異なっている。しかも、年少者であるため日本語の習得が早く、成人の韓国人日本語学習者とも異なる。つまり、日韓バイリンガルのうち、ニューカマー年少者として位置づけられ、新たな領域を占めていると思われる。

今後、彼らの実際の自然談話などを収集し、言語行動の実態及び言語運用能力を詳しく分析する必要があると思われる。さらに、今回調査した言語環境との関連を再確認する必要がある。これらに関しては今後の課題にしたい。

参考文献

- 生越直樹(1983) 「在日朝鮮人の言語生活」『言語生活』376 筑摩書房
- 生越直樹(2005) 「在日コリアンの言語使用意識とその変化」『在日コリアンの言語相』和泉書院
- 朴良順(2003) 『滞日韓国人中高生における言語行動』東京都立大学修士論文(未公開)
- 朴良順(2005) 「日本語・韓国語間のバイリンガリズムとコード・スイッチング」『日本語研究』25 東京都立大学国語学研究室
- 黄鎮杰(1994) 「在日韓国人の言語行動—コード切り替えに見られる言語体系と言語運用—」『日本学報』13 大阪大学文学部
- 吉田さち(2005) 「二言語の能力とコード・スイッチング—韓国系民族学校の高校生を対象として—」『社会言語科学』8-1 社会言語科学会

(ばく やんすん・東京都立大学大学院生)